

てんかんからみる人物の横顔

～異論異説のてんかん史～

松浦雅人

田崎病院副院長／東京医科歯科大学名誉教授

【第25回】

マージアッド・エヴァンズ

—レノックスが教科書に引用した英国の女流作家—

Evansにとって、てんかん発作は時間と存在の連続性を失わせ、“自己の喪失”として体験された。発作は完全な暗黒をもたらし、究極の真実で、死のリハーサルであった。てんかん発作は死について考えさせてくれ、その間は精神の平穏を感じ、死はおそれることではないことを実感させてくれた。

はじめに

Margiad Evans はペンネームであり、本名は Peggy Eileen Whistler (1909～1958) という(写真)。英国ロンドン近郊のミドルセックス州に生まれた。父方の祖母の名前 Evans からペンネームを付けた。子ども時代には叔母の住むウェールズ郊外のロス・オン・ワイ(ワイ川沿いのロス町)を定期的に訪れた。1940年に結婚してからは、夫の職場のあるウェールズの村に移り住み、生涯にわたって温暖で雨の多いウェールズの田園を愛した。1932年、23歳の時に最初の小説『Country Dance』を発表し、続いて翌年に『The Wooden Doctor』、翌々年に『Turf or Stone』、27歳の時に『Creed』を発表したが、



イラストレーション 内山洋見

マージアッド・エヴァンズ

いずれもウェールズを舞台にしている。『Country Dance』は後にBBCラジオでシリーズ化され、34歳の時に発表した『Autobiography』とともに Evans の代表作となった。

1950年、41歳の時、Evans はてんかんと診断され、その直後に妊娠4カ月と判明する。娘は無事に生まれたが、その間の揺れ動く心情や葛藤を1952年

に『A Ray of Darkness』¹⁾と題して出版した。その著作の冒頭には「私のてんかんの物語…身体と精神の冒険」(『A Ray of Darkness』12頁、以下同)と書かれている。さらに、1953年5月19日にはBBCのラジオ番組で“A silver lining”と題して自らのてんかんについて語っている。当時、てんかんへの一般の人の関心は乏しく、今以上に秘

SAMPLE

Epilepsy Vol.13 No.1 (2019-5) 47 (47)

Copyright(c) Medical Review Co.,Ltd.